

当院におけるオカレンスレポートの 現状と課題

小久保 学[†] 安積喜美代第77回国立病院総合医学会
2023年10月21日 於 広島

IRYO Vol. 79 No. 2 (77-82) 2025

要 旨

【背景】過去のインシデントレポート分析から、急変・コードブルーなどの報告が少ない、医師報告の内容の偏りが認められていた。それを解消するため、令和4年5月に電子カルテシステムの更新にともないオカレンスレポートを導入した。その内容は過失の有無に関係なく、医療行為に関連した合併症や副作用発生時の報告とした。オカレンスレポート導入後の変化について調査を行ったため報告する。【方法】インシデント報告分析支援システム ePower/CLIP[®]を用い、2019年度～2022年度のインシデントレポート・オカレンスレポートの総数・傾向などの分析を行った。【結果】インシデントレポートの総数は、2019年度1,735件、2020年度1,714件、2021年度1,836件、約1/3が薬剤関連、約1/4が転倒であった。医師報告は2019年度219件、2020年度192件、2021年度1,216件で、約2/3を転倒報告が占めていた。2022年度インシデントレポート1,776件、そのうち医師報告131件、6割が転倒報告であった。2022年度オカレンスレポート件数は21件（医師14件、看護師2件、コメディカル5件）であった。そのうちコードブルーは3件、急変事例は4件であり、増えてつつある印象であった。医師報告については、手術に関連したもの6件、治療上の合併症4件で、残りの4件はコードブルー・急変であった。またオカレンスレポートの事例検討から、経口抗凝固薬の休薬・再開に関する管理体制の改善を行った。【結語】オカレンスレポート導入後、コードブルー・急変などの報告は増加傾向であった。医師報告は全体として捉えるとやや減少したが、手術関連・合併症報告が増えはじめた。このような報告がさらに増えるよう、引き続き医療安全推進部として取り組んでいく必要がある。

キーワード オカレンスレポート、インシデント、経口抗凝固薬

背 景

国立長寿医療研究センター（当センター）は6つめのナショナルセンターとして平成16年に開設さ

れ、平成22年に独立行政法人化した。当センターは理念として、「高齢者の心と体の自立を促進し、健康長寿社会の構築に貢献する」を掲げている。その背景には我が国は現在人口の28%以上を65歳以上の

国立研究開発法人 国立長寿医療研究センター 医療安全推進部 [†]医師
著者連絡先：小久保 学 国立研究開発法人 国立長寿医療研究センター 医療安全推進部
〒474-8511 愛知県大府市森岡町 7-430
e-mail : mkokubo@ncgg.go.jp
(2024年3月29日受付 2024年8月2日受理)
Current Status and Challenges of New Occurrence Report System in Our Hospital
Manabu Kokubo and Kimiyo Azumi
National Center for Geriatrics and Gerontology
(Received Mar. 29, 2024, Accepted Aug. 2, 2024)
Key Words : occurrence report, incident, direct oral anticoagulants (DOAC)